

~Liberta~

Liberta

## The beginning of the morning～始まりの朝～

---

朝の時間ってものは実に貴重である。

少しでも長く寝ていたい…。

だけど学生という立場上それも出来ない。

故に気を許してしまえば遅刻してしまうのだ。

そんな決まった生活を俺は打破したい。

そう、自由が欲しいんだ！

しかし現実というのは余りにも厳しい。

毎朝7時には我が妹、高坂和歌が必ず起こしに来る。

全国の男性諸君！

羨ましいシチュエーションだと思うだろう？

初めに言っておくが、それは余り良いものではない。

妹の起こし方ときたら酷いもんだ。

まず7時になると同時に俺の部屋のドアを、壊れるんじゃないかというくらい強引に開ける。

それから、カーテンをさっと開けて布団を俺から剥がしベットから叩き起こす。

「いつまで寝てんの翔兄さん！朝御飯冷めちゃうから早く降りて来てよね。」

満面の笑みを浮かべ妹はそそくさと一階へ降りていった。

「やれやれだぜ…。」

もう少し優しい起こし方は出来ないものだろうか。

まあそのお陰で遅刻はしないで済むのだが。

こうして始まる俺、高坂翔の1日だ。

いつになったら自由な生き方が出来るのか、先はまだまだ長いもんだな。

それはさておき、ここで簡単に我が高坂家の事を話しておこう。

まずは先程も登場した我が妹、高坂和歌。

こいつは俺の一つ年下の妹で高校一年生だ。

成績優秀でスポーツ万能、モデル並みに美人、おまけに家事も出来る。本当に何でもこなす出来た妹である。

次に両親だが、今は海外出張中で家には居ない。

こんな妹が居るからこそ安心して両親は家を任せられるんだろうな。

最後に俺、高坂翔は特にこれと言って取り柄はない普通の高校二年生。強いて言えばアニメが好きだ。

毎週木曜日の学園系アニメは欠かさず観ている。

そして非日常的な世界に憧れ、本当の自由を求め生きている。

そんな感じで、高坂家には和歌と俺の二人暮らしってわけ。

だから毎朝あんな風になっちゃうんだ。

「おっと、そろそろ降りなきゃな。」

着替えて下に降りる。

リビングに入ると和歌が待っていた。

「おっそーい！いつまで待たせるつもり？早く食べよっ。」

「わーったよ。」

二人席に着いて朝御飯を食べる。

「いただきますっ！」

相変わらず和歌の作る料理は美味い。

口では言わないけど。

「...ねえ？」

「どうした？」

「私、良いお嫁さんになれるかな？」

ゴッホ、オッホ、ゲホ...

いきなりなんて事を言いやがる。

「うええ？だ、大丈夫翔兄さん！」

「大丈夫っ！い、いきなりどうしたんだ？」

「昨日ね、綾華ちゃんに和歌は何でも出来るし良いお嫁さんになるね！って言われたの。」

なるほど、そう言うことか。

因みに和歌が言ってる綾華ちゃんってのはこいつの親友だ。

「確かに和歌は完璧だし、良いお嫁さんになれるかもな。」

「そう...かな？自信ないなあ私。」

おいおい、何でも出来る奴が自信ないだと？

全世界の男子にアンケート取っても100%完璧だと答えられそうなのに？

「自信なんて後から付いてくるもんだろ？」

「悩むのは素敵な相手を見付けてからでも遅くはないんじゃないの？」

何故か不機嫌になる和歌。

「相変わらず翔兄さんは鈍いんだから...相手なら目の前に居るのに。」

「ん？何か言ったか？」

「別にっ！さあ食べたら早く学校行こう。遅刻しちゃうよ？」

「おう。」

学校に行く支度をして玄関のドアを開ける。

## Cheerful spring～春の陽気～

---

春風が桜の花弁を運んでくる。

「良い天気だ。」

こういう日はずっと寝ていたいくらいだ。

和歌は部活の助っ人があるからと、俺より少し先に家を出て行ってしまった。  
なんと高校入って間もないというのに体育会系、文化系共に勧誘の嵐だという。  
まったく忙しい奴だな。

俺は自由を好むので、特に部活に入るつもりはない。

一応ほとんどの部に仮入部的な事はしたが、面白くなくて辞めた。

どこの部も普通過ぎて呆れた程だ。

それにしても綺麗な桜並木だ。

うちの桜ノ坂高校は名前の通り、桜並木が続く坂道を登った所に建っている。

初めはこの坂を登るのが嫌だった。

慣れてって怖いもんだよな。

一年間、嫌でも登り続けてたらそこまで苦にならないもんだ。

「翔ちゃんおはよう！」

後ろから俺に手を振りながらこっちに来るのはお馴染みの新田真弓。

「真弓おはよう！」

真弓は幼稚園の頃からの縁で今でも仲が良いお姉さんの存在だ。

いつも真弓に勉強を見てもらっていてテストの時はとても助かってる。

因みにこいつ学年トップの秀才。

それに天然系で結構男子からも女子からもモテモテ。

なのに今まで付き合った奴は居ないとの事。

「翔ちゃんにしては朝早いね(笑)和歌ちゃんにまた起こしてもらったの？」

俺としてはギリギリまで寝たかったよ。

「まあな、真弓はいつもよりのんびりしてんのな。」

「うん、今日は図書委員の仕事もないからね。」

「そっか、そりゃ良かったな。」

二人で坂を登りながら話していると学校に着いた。

クラスに入ると窓際後方二番目の席に座り込む。

真弓はその目の前の席に着いた。

HRが始まり担任の宮城先生が教壇に立ち今日の時間割りについて話す。

「今日の2、3限目の英語の授業なんだけど担当の先生休んでるから自習にする。」

教室内がざわめく。

俺としてもこんなラッキーな事はない。

決まった授業より、マイペースに自由に学習してた方が楽で良い。

自由最高！

「自習だからって遊ぶんじゃないぞ！今月末テストあるからな？」

一気に教室がブーイングの嵐に。

なんて分かりやすいんだコイツ等。

そんなこんなで2、3限目は真弓に英語を教わりながら自習を行った。

お昼になり、和歌が作ってくれた弁当を真弓と一緒に食べる。

「今日も和歌ちゃんの愛妻弁当美味しそうだね！羨ましいなあ。」

「何が愛妻弁当だよっ！実妹だっつうの。」

「私も和歌ちゃんみたいな妹欲しいなあ、なんて(笑)」

「真弓だっていつも手作り弁当持参してんじゃん。それに美味しそうだし。」

「えっ、これくらい普通だよ。それに簡単なものしか作れないし。」

「じゃあさ真弓が作った卵焼きと、この唐揚げ交換しない？」

「い、良いの？」

「おう、良いぞ！」

「それじゃあ...。」

一応言っとくが、端から見たらカップルかよって思う奴も居るらしいがそんなんじゃない。

「おっ、めっちゃ美味しいじゃんこの卵焼き。」

「そうかなっ？でもでも、この和歌ちゃんの作った唐揚げの方がめっちゃ美味しいよ。」

それ言ったらあいつ喜ぶだろうな。

「今度料理教えて貰おうかなあ。」

なんて一人言の様にぶつぶつ呟いている真弓。

お昼を食べ終わると、真弓は女子の輪に混ざりに行った。

俺は自販機に飲み物でも買いに行こうかな。

## Nap～うたた寝～

---

自販機で紅茶を買いベンチに腰を下ろす。

風が心地良いし、食事の後だと何だか眠くなる。

暫くうとうとしてるとつい寝てしまった。

「高坂！おい、高坂！そんなところで寝ていると風邪引くぞ？」

その声を起こされ目を開けると、何とバイト仲間の櫻井夏希が居た。

「ああ、すまん夏希。気持ち良くてつい眠ってしまってたわ。」

夏希は俺と同じく二年生でバイトを幾つか掛け持ちしてるみたい。

俺と夏希が働いているバイトというのが近所にあるファミレスだ。

「別に良いけど、今日シフト入ってたっけ？」

「いや、今日は休みだ。明日は入ってるけど。」

「そっか、夏希も明日は入ってるから一緒に頑張ろうな！」

「おう。起こしてくれてサンキューな。」

「うん、じゃあ次体育あるからまたね！」

体育...？

いっけねえー、もう5限目始まるのか。

次の授業なんだっけな？

急いで教室に戻ると、高校入って知り合った友達の遠藤さやが何やらソワソワしていた。

「どうしたんだ、さや？」

突然話しかけたから背筋がピクツとなり驚いた。

「はあ～、ビックリしたあ！なんだ、翔君じゃん。」

「実はさ、次の数学の教科書見付からないんだよねー。」

なるほど、次は数学か。

待てよ？数学の教科書だったら、確か俺が一昨日借りてたはず。

つうか、貸した本人すら忘れてるとかヤバイな。

「すまん、この前貸して貰ったっきり返すの忘れてたわ。これだろ？」

「あっ、そっかあ翔君に貸してたんだっけ。うっかりしてたよ。」

「よし、教科書も見付かったことだし急ごうぜ！」

「うん、行こう！」

数学は教室が別にあって移動しなくちゃならないからだ。

真弓は先に行ってしまったみたいだな。

取り敢えず、急ぐとしよう。

## New club～新しい同好会～

---

なんとか5限目も間に合い、6限目もポーッとしながら受けていた。

「やっと今日の授業も終わりだな。」

「翔ちゃんお疲れ様。今日はバイトないんだよね？一緒に帰らない？」

「悪い真弓！今日は放課後アニメ同好会の先輩に呼ばれてるんだよね。」

「そっかあ。そりゃ残念！んじゃまた今度ね。バイバイ。」

「じゃあな、気を付けて帰れよ！」

さて、面倒だがアニメ同好会に顔だして来ますかね。

俺も和歌ほどではないが仮入部してた時の先輩にたまに呼ばれるのだ。  
場所は移って、ここは部活動とは違う同好会が集まる別館に俺は来ている。  
皆はこの別館を同好会館と呼んでいるらしい。

その同好会館には部活で馴染めなかった奴等が新たに結成した同好会が多い。  
アニメ同好会もその一つだ。

「やっと着いたぜ。」

...コンコン！

ノックしてみるが応答がない。

あれ？部屋間違ったかな？

しかし、扉にはちゃんとアニメ同好会の看板がぶら下がってる。

「おかしいなあ、誰も居ないのかな？」

ドアノブを回してみると、ガチャという音が。

「なんだ、開いてるじゃん。すいませーん、誰か居ますか？」

呼びかけながら部屋を開ける。

目の前にはアニメ上映中のスクリーン。

暗いので電気をつけてみる。

すると、スクリーンの前にあるテーブルで寝ている先輩発見。

「坂本先輩、起きてください！」

身体を揺すってみるが起きない。

仕方ない、あれをやるか。

「坂本先輩、早く起きないとドーナツなくなっちゃいますよ？」

「...ふにゃあ、ドーナツ？どこどこドーナツどこにあるの？」

「もうありませんよ？」

「ええ？ドーナツは？後輩君食べちゃったの？」

「坂本先輩が早く起きないからですよ。」

「そんなあ～。」

「それより、俺を呼び出したのは何ですか？」

やっぱりドーナツの事となるとすぐ起きたな。

「あ、そっか私が呼んだんだっけ。」

「そうですよ。なのに来たら寝てるんですもん。」

「ゴメンね。実は今制作中のアニメを後輩君に観てもらって感想が欲しかったのだよ。」

「なるほど、そういうことですか。良いですよ？」

それくらいなら別に良いか。

「ありがとう、後輩君。」

30分くらいのアニメを力説されながら一緒に観る。

なかなかの作品だった。

俺としては結構好きなタイプのアニメだったし、何よりストーリーが泣けた。

その旨、先輩にストレートに伝えた。

「さすが後輩君！素敵な感想をありがとう。」

「また昼休みに視聴覚室で上映会でもするんですか？」

「まあね。その前に誰かの意見が聞きたかったのだ。」

「そういうことでしたら、知り合いにも声かけておきますよ。」

俺は上映会の度に知り合いに声をかけてあげている。

「いつもありがとう。いやあ、助かるよ。今度ドーナツ奢ってあげるから入部届けにサインを！」

「そりゃ楽しみですね、って勝手に俺の名前書かないでくださいよ！」

「ちえっ。後輩君だったらいつでも歓迎なのになあ。」

「そりゃ光栄ですが、俺は自由に生きていたいんですよ。」

「だったら、後輩君も何か新しい同好会作ってみたら？」

「新しい同好会か...。」

その発想はなかったわ。

「まだ良く分かりませんが、検討してみますよ。」

「おお、出来たら私も呼んでね！遊びに行くからさ。」

相変わらず元気な人だ。

さて、そろそろ帰ろうかな。

あまり遅くなったら和歌に怒られちゃうからな。

「それじゃ俺は帰ります、上映会頑張ってください！」

「うん、じゃあね後輩君！」

...新しい同好会ねえ。

## Noisy holiday～騒がしい休日～

---

坂本先輩に新同好会結成を勧められてから約一月。

今はGW中で学校は休みだ。

家には朝から和歌の友達が遊びに来ている。

和歌の友達とはいえ女子高生が家に来ている…。

それだけでソワソワして落ち着かないのだ。

更に追い討ちをかけるように、隣の部屋からは女子高生の話し声。

そう、俺と和歌の部屋は壁を一枚隔ててあるのみ。

なので声が大きくなるとどうしても隣に聞こえてしまう。

プライバシーもくそもねーわな。

それにGW中に観ようと買っておいた漫画も集中して読めないではないか。

「くそっ、かったるいな。」

仕方なく出掛ける事にした。

一応、和歌には出掛けるとメールを入れておいたし大丈夫だろう。

それにしても、家で行き場を無くした親父になった気分だぜ。

「さて、何処に行こうかな。」

取り敢えず落ち着ける喫茶店にでも行ってみるか。

暫く歩いているとピラ配りをしている人がいた。

「GWに新しくオープンした喫茶店でーす！オープンセールもしているので是非ご来店お待ちしてまーす！」

ピラ配りって簡単そうに見えて実は意外と大変なんだよな。

全然受け取ってもらえない時はかなりへこむもんだ。

俺はピラ配りのバイトをした事があって、それ以来見かけたら受け取ってあげるようにしている。

「すみません、一枚下さい！」

「はい、どーぞ！ご来店お待ちしてまーす…って高坂じゃん！」

「あ、あれ？夏希じゃないか！」

確かこいつバイト掛け持ちしてたんだっけ。

まさかピラ配りしてるとは思わなかったぜ。

そんな事よりツッコミたいことがあるんだが…。

「ピラ配り大変そうだな(笑)」

「まあね、でもこんなバイト初めてだから恥ずかしさもあるんだ。」

なるほど、だからそんな格好してるんだな。

ピラを見ながら一応聞いてみる。

「もしかして、このメイド喫茶で働いてるのか？」

「そうだよ！開店前に皆でピラを配って歩いてるんだ。」

そう、俺の目の前に居るのはポニーテールが良く似合うメイドさん。

やべえメイドさんの友達出来ちゃったよ、スゴくない？

「そうなんだ、めっちゃ似合ってるなメイド服！」

「あっ...ありがとう。」

照れてるメイドさんもかなり可愛い。

メイド萌えとはこの事を言うのだろうか。

「ちょうど喫茶店行こうとお店探してたんだ。」

「夏希もピラ配り終わったら店戻るから待ってなよ！」

「特別にサービスしてあげるからさ。」

「わかった、それじゃお店で待ってるわ。」

## First maid cafe～初めてのメイド喫茶～

---

店の前に着くと結構な行列が出来ていた。

新しい店ってだけで気になるのに、それがメイド喫茶となると益々気になってしまうわな。

列の最後尾に並んで待ってる間暇だったから、夏希から貰ったピラに目を通す。

チェキ撮影やステージパフォーマンスなんかもあるんだな。

実はメイド喫茶行ったことがなかったので興味津々な俺。

「今更だが、一人で入るの気まずいな。」

今から誰か呼ぶにも無理があるし、自分の番になったので一人で入る事にした。

「お帰りなさいませご主人様っ！」

ツインテールでツンデレ系キャラのメイドさんが出迎えてくれた。

空いてる席まで案内されメニューを渡される。

「はい、水！別にあなたの為に用意したわけじゃないんだからネ！」

「あ、ありがとう。」

「注文が決まったら好きなメイドを呼びなさい。」

「私を指名するとか全然期待してないんだからー！」

「指名して欲しいんだな(笑)」

どうやらこのメイド喫茶では予め対応してくれるメイドさんを選べるシステムらしい。

可哀想だが夏希でも指名してやるか。

五分くらい注文を考えていると、夏希がピラ配りから帰ってきた。

「すみません指名お願いします。」

またさっきのメイドさんが来てくれた。

「指名したい娘決まったわけ？」

「んじゃ夏希でお願いします！」

「あれ？ご主人様ナッキーとお知り合いなわけー？」

ナッキー？(笑)

「うん、同じ学校で友達なんだよ。」

ここでは夏希はナッキーとしてメイドさんをしているらしい。

「ふっ、ふうん。まあいいわ、待ってなさい！」

すまんメイドさん。

がっかりした面持ちでカウンターの方へ向かうメイドさんを見ていると罪悪感あるな。

今度はあなたを指名してあげますよと心の中で呟いた。

## Usually with different friends～普段と違う友達～

---

カウンターに居た夏希が対応してくれる事になった。

「ご主人様お待たせしました。ご注文をお伺いしまーす！」

「こういうトコ初めてなんだけど、オススメとかある？」

少し考える可愛い素振りをしてメニューを指差しながらこう言った。

「そんなご主人様には初恋セットがオススメだよ。」

初恋セット？なんだそれ。

まあいっか。

「んじゃそれ頼むわ。」

「ありがとにゃん、ちょろんと待っててネ！」

こいつキャラ変わり過ぎだろ。

そういうバイトだから仕方ないけど、何だか慣れないな。

因みに、俺が頼んだ初恋セットの内容がこれだ。

指名したメイドさんとチェキ撮影をする。

それから指名したメイドによるステージパフォーマンス。

更に特製オムライスにドリンク、デザートとロシアンルーレットのたこ焼きまで出てくる。

つまり、お得セットなわけだ。

だが俺はこの時、初恋セットの本当の恐ろしさを分かっていなかった。

「お待たせしましたご主人様！」

極上スマイルでたこ焼きと飲み物を運んできた。

「あ、ありがとう。」

「それじゃ食べさせてあげますね！」

そう言うと、夏希はいきなりからし入りロシアンルーレットのたこ焼きを俺の口に近づけた。

「はい、あーん！」

「んぐっ、あ...あつつ。」

危うく火傷するところだったぜ。

この店というか、こいつ個人的に楽しんでやがる。大丈夫なのかこの店。

こいつに支配されてなどいないだろうか。

「これくらい全然熱くないでしょ？少しくらい我慢しなさい。」

夏希は自慢気に腕を組んで笑っていた。

コイツめ...。。

可愛い自分があんたなんかにご奉仕してあげてるんだから、感謝しなさいと言いたげそうな顔でみてやがる。

「阿保かお前は。どこの店にお客にアツアツの飯を口に突っ込んでくるメイドがいるんだよ。」

「ここにいるでしょう？」

「まあ確かに目の前に生意気なメイド様がいらっっしゃいますな。」

たこ焼きを急に口に入れられたので、嫌味っぽく話しながら味わっていた。

「ん！？なんだこのたこ焼き！！めちゃくちゃ美味しいぞ！」

その反応を見て、夏希は嬉しそうにしている。

「そのたこ焼き私が作ったんだよ、美味しいでしょ？」

態度は悪いくせに今まで食べたどのたこ焼きよりも一番美味かった。

「うん、美味しい。びっくりしたぜ。」

俺はこの時思った。

夏希が俺の口に突っ込んだのが、ハズレのたこ焼きじゃなくて本当に良かったということだ。

「はい、ご主人様どんどん食べてください！」

二個目を口に含んだその時である。

「かつらあ——————い！！」

実は俺辛いのは大の苦手である。

「水、水、水くれ————！！！」

慌てて夏希が水を渡してくれた。

「ご主人様は辛いのがダメでしたっけ？(笑)」

笑いながら、見ている夏希。

笑いごとじゃねー。

こうなることはわかってはいたが、こういうのって複数人と食べるもんじゃね？

「あっ、言い忘れてたけど私たこ嫌いだから全部食べてね。」

それを先に言えよ。

夏希がたこ嫌いとわかっていれば、最初のメイドを指名してやったのにな。

今更足掻いても後の祭りであるが...

「これ一人で食うとか鬼かよ、ぼったくりじゃねーか！」

「残したら罰金だからね、罰金。」

何か慌てた様子でカウンターの方へ走って行った。

どこの焼き肉店だよと心の中で豪快に突っ込みを入れてやった。

勿体ないから我慢して口に入れていく。

幸いなことに、からし入りのたこ焼きは二つだけであった。